

乳児期の母子関係

— Attachment の形成を中心に — (後編)

岡野雅子

前回に引き続き、今回は attachment 行動と摂食状況、object attachment—養育行動—などの関係について、また、母親が職業を持っている場合や、子どもの側の男女の性差や兄弟順位と attachment 行動の関係についても検討してみよう。

(一) 摂食状況と attachment 行動の関係

栄養法については、母乳のみは一六・二％にすぎず、母乳と人工乳を併用している場合は四二・三％、人工乳のみは四一・五％となっている。

授乳のしかたについては、与える時間を決めている、あるいはだいたい決めている場合が多く、七六・三％で、栄養法と関連させて見てみると、母乳の場合には、時間を決めずに「子どもが空腹の時や空腹以外の泣き声の時にも与える」傾向がみられた。また、飲ませ方では、七割がひざの上に抱いて飲ませると答えている。

るが、母乳の場合にはすべて必然的にそうであるが、人工乳の場合には寝かせたまま飲ませるが四分の一以上いた。

栄養法と各 attachment パターン出現率との関係をみると、平均的出現率では、母乳児の方が人工乳児よりもやや高くなっているが、その差は統計的に有意な差ではない ($P < 0.25$)。また、九パターンの各々もすべて著しい差は見い出せなかった。

授乳の時間と attachment 出現率の関係では、「時間を決めないで子どものほしそうな時に与える」(自律授乳)の方が、「時間を決めて与える」(時間制授乳)よりもわずかに高い出現率となっているが統計的差はない ($P < 0.50$)。各パターンでは、「視覚的定位」が時間制授乳の群に多く、「接触」が自律授乳の群に多くなっている。

飲ませ方と attachment 出現率の間には、「寝かせたまま」と「ひざの上に抱く」の群について、ほとんど差は認められない。

(P>0.75)。しかし、各パターンについて見ると、「安全基地からの探索」がひざの上に抱いて飲ませる群の方が多く出現している。このことは注目に値すると思われる。というのは、この行動型は、前項(一)で考察したように、他の attachment 行動のバリエータともなると思われるからである。従って、ひざの上に抱いて飲ませる母子関係の方が、寝かせたまま飲ませるような母子関係よりも、attachment がより強くより安定しているのかもしれない。

したがって、以上の結果から、母乳と人工乳の栄養法それ自身が直接 attachment の形成に著しく作用していることはないようであるが、その二次的な産物としての授乳のしかたの違いが、乳児の母親への attachment の形成に影響を及ぼしていると考えられるのではないだろうか。

(四) object attachment と attachment 行動の関係

object attachment (狭義) は全体で二・三%の子どもに見られ、生後一五か月をすぎた頃に、急激に増し、半数に認められる。栄養法との関係では、やや人工乳児の方が母乳児に較べて object attachment がある傾向が見い出された (P<0.25)。

指しゃぶりについては、約半数の子どもが、指しゃぶりをし

ている、あるいは以前にしていた、と答えている。月齢別では生後六か月までが七五%で一歳までの乳児では半数近くに見られるが、一歳をすぎると急速に減少してゆく。栄養法と指しゃぶりの関係は、あまり差は見い出せない (P>0.50)。

object attachment (狭義) と指しゃぶりの関係については相関関係は見い出せない (P>0.975)。

次に、母親への attachment 行動との関係を見てみると、object attachment ありの群の方が母親への attachment をより多く現わす傾向がやや見られるがほとんど差はない (P>0.50)。各パターンでは「接触」「差別的微笑発声」以外の七パターンは、object attachment ありの群に多く、中でも「追従」「差別的に泣く」「安全基地からの探索」は著しい。

指しゃぶりと attachment 行動の関係では、指しゃぶりしない群の方が attachment を多く現わす傾向がある (P<0.25)。各パターンでは、七パターンまでが指しゃぶりをしない群の方に多く現われていて、「追従」と「安全基地からの探索」は両群間の差が著しい。

しかし、ここで思いあたるのは、object attachment ありの群となしの群、指しゃぶりのありの群となしの群では、対象児の月齢が片寄っていることである。それを考慮に入れて見ると、

attachment の出現率が object attachment ありの群、指ししゃぶりのなしの群に多いこと、特に発達の要因の大きい、「追従」「安全基地からの探索」が多いことは、ある程度当然のことと思われる。しかし、さらに見てみると、ここで注目すべき特色は、object attachment ありの群が月齢が高いことにもかかわらず低い出現率を示しているパターンが「接触」と「差別的微笑発声」である点である。しかし、前項(一)で見たように、「差別的微笑発声」は月齢との関係が比較的少ないパターンであるのもかくとして、「接触」は注目すべきであると思われる。つまり、object attachment がタオルやふとんなどの肌ざわりのよいものに固執的な愛着を示す行動であることを考え合わせると、object attachment は、母親のひざによし登ったり体になわたり顔や衣服で遊ぶことの少ない子どもの場合に多く現われる傾向がある、ということを示しているようである。

四 養育行動と attachment 行動の関係

子どもの世話をする人は八一・五%が「ほとんど母親だけ」と答えている。

attachment の対象になっている人については、世話をする人よりもずっと多くの人が挙げられた。特に注意をひくことは、母親

以上に子どもの世話をすることのない父親や兄弟が母親よりも強く attachment されている場合があるようである。その場合に、母親に「あなたから見て、どうして養育者であるあなた以外の人に一番なつくと思いますか」を問うたところ、「私(母親)は叱るが父親は叱らないから」あるいは「父親は遊ぶ時に大きな動きをしてくれるから」と答えている。月齢別では、attachment の対象となっている人が母親だけという場合は一歳前に多く、一方、母親以外の人に一番強く attachment を示す場合は一歳以後多くなっている(P < 0.10)。この解釈として次のように考えることができよう。Shaffer (一九六三)は、ある特定の人(多くの場合は母親)に attachment を形成するとしばらくして第二の attachment の対象者が形成される場合が多い、と報告している。したがって、本結果は、一歳をすぎる頃から attachment の対象が母親だけ、という段階をぬけ出し、attachment の対象となる人が広がってゆく、ということの表われではないかと思われる。そしてさらに進んで、父親あるいは兄や姉に母親以上の attachment を示すようになったのではないだろうか。

一緒に遊ぶ人、については、さらに一層多くの人が挙げられた。母親のみの回答は三三・九%で、母親以外の人が一番よく遊び相手をする場合が二五・三%である。月齢別に見ると、母親だ

けという場合は月齢の低い時期に多く、次第に母親とも遊ぶが他の人とも遊ぶようになり、さらに月齢が進むと母親以外の人と一番よく遊ぶようになる、という傾向が見い出される。

attachment の対象となっている人と一緒に遊ぶ人との関連を見ると、あまり強力な関係は見い出せない (P₁∧O₁E₁) が、しかし、母親以外の人 attachment の対象となっている場合 (二四人) をよくみると、多かれ少なかれ、その人 (父親、兄弟、祖母) が遊び相手となっている。

遊びの内容については、大きく分けて「身体接触」「声や顔の表情」「おもちゃ」と整理してみると、「身体接触」は月齢の低い子に多く、月齢が進むにつれて「おもちゃ」を使って遊ぶが増加してゆく。また、「主にそはで見ていただけ」という回答は六か月から一八・〇か月の間にあり、それ以前以後にはない。

子どもに満足を与える状況については、回答はこまかく分かれ、広い個人差が認められる。その中で共通してみられる状況をまとめてみると、生後六か月までは満腹と寝起きが多く、まず生理的要求が満たされることが重要なようである。六か月から九か月では、満腹、抱っこ、体を動かしてやること、など。九か月から二か月では、外へ出た時、父親と一緒に体を動かして遊ぶ時。この月齢では外へ出るといってもただ外へ行ってみるという

だけでほとんど自分からは何もしないようである。一か月から一五か月では、外に出た時、父親と一緒にの時、兄や姉と一緒にいる時。一五か月から一八か月では、棚の中の物を出すこと、本の中に自分の知っている言葉が出てきた時などもあり、次第に自分からいろいろなことをやりはじめ探索活動の増大が見られる。一八か月から二か月では、姉と一緒にの時、人が来た時など、他の人と一緒にいる時の関係を保つことができるようになる。二か月から二四か月では例は少ないが、絵本を見る時など。

子どもが泣いた時の母親の対処のしかたについては、月齢の低い子どもの場合には泣くと母親はすぐに抱き上げる傾向があり、月齢が進むにつれてそのまま放っておくようになるようである。

次に、attachment の対象となっている人と母親への attachment 行動の関係について見てみよう。attachment パターン出現率は、母親以外の人が一番強く attachment している群の方が、母親のみに attachment している群よりも、母親への attachment 出現率が若干高い傾向がある。これは、母親以外の人に attachment している群の方が、月齢が比較的高いためもあるが、しかしそればかりではなく、母親以外の人に一番強く attachment を示している子どもは、すでに母親への attachment が形成されていて、その余裕と安定によって母親を基地として他の人にまで attach-

ment を形成させることができたのではないかと考えられるだろう。

一緒に遊ぶ人と母親への attachment の関係については、母親以外の人と一番多く一緒に遊ぶ群の方が attachment 出現率は若干高い傾向があるがこれも同様に解釈できるのではないだろうか。

子どもが泣いた時の母親の対処のしかたと母親への attachment 行動については、平均出現率はごくわずかにすぐ抱き上げる群が、そのまま放っておく群よりも高い。しかし、すぐ抱き上げる群は、月齢の低い子どもに多いことを考えに入れると、これは同月齢間では、すぐに抱く群の方が、attachment 出現率が高いであろうと思われる。この質問は、母親の子どもを育てる方針を聞く意味で設けたものであるが、やはりその一端がうかがえたようである。つまり、子どもが泣くとすぐに子どものもとに飛んで行き、抱き上げあやしたり体を揺ったりする母親は、子どもにとっては自分の要求に対していつもタイムリよく応答してくれる人となるのであろう。なお、Schaffer (一九六三) は、attachment 行動を形成した例として、一度も子どもに授乳したことのない少女が attachment の対象者となったことを挙げ、その解釈として、その少女が赤ん坊が泣いた時にタイムリよく反応したことであ

り、それが大変重要なのではないかと考察している。

(四) 母親の職業の有無と attachment 行動の関係

母親が職業をもっていない場合にはほとんどが母親一人が子どもの世話をしているのに対し、母親が職業をもっている場合にはその他の家族や保母などの世話をうけることになる。したがって、時間的には両群の間に明らかな差が出てくるが、しかし、職業なしの母親が「ほとんど一日中つききり」でいるといっても、Cautell (一九六七) が日米の比較研究で指摘したように、日本の母親は、何もしないが子どものそばにいる時間が多い、という習慣によるものかもしれない。なお、両群の対象児の月齢にはほとんど片寄りはない。

母親の職業の有無と object attachment の関係については、職業なしの子どもの方が若干多く見られるが、ほとんど差はない (P < 0.05)。指しゃぶりについても同様で、職業なしの子どもの方が若干多いが、これもほとんど差はない (P < 0.05)。

母親への attachment 行動については、平均出現率で、職業なしの方がやや高い傾向があるが、著しい差はない (P < 0.05)。各パターンでは、職業ありの方に著しく多く出現するものに「見えなくなると泣く」「あいさつ」があり、著しく出現の少ないもの

は「差別的に泣く」「追従」である。

「見えなくなると泣く」と「追従」の関係であるが、「見えなくなると泣く」は平均七・五か月に現われるのに対して「追従」は平均八・六か月に現われる。したがって、職業ありの場合には、「見えなくなると泣く」は母親がいなくなることを経験して、そのような時に泣くのであるが、しかし、その後自分で這うことができるようになったとしても、また母親が出かけることを充分に承知してもはや追従は多くは出現しないのではないかと考えられるであろう。

さらに、attachment 行動の出現時期について見てみると、平均出現時期は、全体平均が七・三七か月に對し、職業ありの群では七・五か月と遅れている。各パターンでは、職業ありの群が「接触」と「しがみつき」がやや早く「視覚的定位置」がごくわずかに早いほかは、いずれも全体平均より遅くなっている。

また、子どものパーソナリティにも共通した点がいくつかあり「たくましい」「誰にでも愛想がいい」「母親にベタベタつかない」などを挙げる母親が多い。しかし、一歳前後のこの特性がその後成長とともにそのままの形で進むものであるかどうかについては明らかでない。

(六) 性差と attachment 行動の関係

まず、性別と attachment の対象者の関係を見ると、母親以外の人に一番強く attachment を示している場合は二四人あつたが、男子一五人、女子九人で、男子の方が母親以外の人に一番 attachment を示す場合がやや多いようである ($P < 0.25$)。また、父親に一番 attachment を示している場合に限っては、男子一人に對し女子五人で、これは差が認められる ($P < 0.05$)。

object attachment については、女子にやや多いがあまり差は認められない ($P > 0.50$)。一方、指しゃぶりについては、男子にやや多いが、差は認められない ($P > 0.50$)。

母親への attachment 行動に関しては、平均出現率は、男女間の差は見い出されない ($P > 0.05$)。また、各パターンについても差の認められるパターンは一つもなかった。

(七) 兄弟順位と attachment 行動の関係

対象児の兄弟順位は、第一子八〇名、第二子四五名、第三子五名で、第三子は少数なので除き第一子と第二子と比較してみよう。月齡についての片寄りほとんどない。

一緒に遊ぶ人については、約半数が、第一子では「母親のみ」に、第二子では「兄弟」に集まっているが(他の半数は「母親と

他の人」、一方、attachment 形成の対象となる人に関しては、第一子と第二子の間にはほとんど差は見られず、両群とも母親のみが多く、第二子の場合に兄弟に一番強く attachment を示している子どもは三名である。この結果から、第二子の場合には、遊び相手が母親のみというのは少ないにもかかわらず、attachment の対象はやはり母親が一番多いわけで、一歳前後の乳児では母親への attachment が第一子第二子を問わず一番強いということが出来るようである。しかし、第二子の場合には、やがて母親への attachment が充分に形成されると次第により遊び相手である兄や姉へ attachment が広がってゆくのではないかと予想することが出来るだろう。

object attachment については、第一子の方が第二子にくらべて多く ($P < 0.10$) また、指しゃぶりについても第一子の方が多い ($P < 0.05$)。

母親への attachment 行動については、平均出現率では第一子の方がやや多いが、各パターンでは「見えなくなると泣く」が著しい差を示している。

また、第二子の場合に、母親は「兄(または姉)の時はママにくっついてばかりいたが、下のこの子はこわいものなし。私がいなくても平気で気にしない。上の子と下の子ではどうしても育一

方が違ってしまうようである」といったような感想を述べることが多い。それを裏づけるように、「見えなくなると泣く」が第一子に多いと思われるが、第二子の場合には、母親がいなくなっても、兄や姉がそばにいる場合が多いためでもあるのだろう。

このように、第一子と第二子の間には、一般に、母親と子どもとの相互作用の差があるようであり、それは接触する時間量の差があるとしても、それ以上に、質的な差が考えられ、母子関係の構造的な差異として考えられるのではないだろうか。

(V) まとめ

以上の結果から、子どもの生育環境に大きな差のない限り、一般家庭児においては、attachment の形成に最もかわるものは「発達」であるように思われる。少なくとも本調査の対象児のように一歳前後の乳児の場合には attachment 行動が形成しつつあるところ、あるいは形成し終わったところにあるため、発達以外の要因のはたらしきを受けるまでには到らない段階であろうと思われるのである。あるいはまた、発達以外の要因がはたかっているとしても、いまだそれが外に行動となって現われるまでには到っていない階段なのではないだろうか。

また、その発達には、非常に大きな個人差があることを指摘し

なければならない。四か月齢で四パターン現われている乳児もいれば、一二月か月齢でも同じく四パターンしか現わしていない乳児もいる。各パターン出現率について見ても四四%から九二%までの幅が認められる。したがって、attachment パターンが多く現われていることのメカ attachment 行動に対する評価の規準とはならないと言えるようである。どの月齢にあって、どの attachment パターンが現われているかが大切なことであり、すなわち attachment の質的内容が問題となるのではないだろうか。

〈付記〉本研究をまとめるにあたり、お茶の水女子大学教授淺見千鶴子先生にご指導いただきました。記して感謝いたします。(群馬県立保育大学)

参考文献

- Ainsworth, M. 1963 The development of infant-mother interaction among the Ganda. Foss, B. M. (Eds) *Determinants of infant behavior* II 67~112
- 淺見千鶴子 一九六九 社会的反応の成立
児童心理学講座第七巻 社会的発達 金子書房
- Dayley, N. & Schaefer, E. S. 1960 Maternal behavior and personal development: data from the Berkeley growth study. *Psychiatric Research Reports* 13 155~173
- Bing, E. 1963 Effect of child-rearing practices on development of differential cognitive abilities. *Child Development* 34 631~648.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. vol. 1. The Hogarth press.
- Bowlby, J. 1958 The nature of the child's tie to his mother. *International Journal of Psycho-Analysis*, vol. 39.
- Caldwell, B. M. 1968 The usefulness of the critical period hypothesis in the study of filial behavior. Endler, N. S., Boutler, L. R., Osser, H. (Eds) *Contemporary issues in developmental psychology*. Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Caudill, W. & Weinstein, H. 1969 Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, Feb.
- Frederberg, N. E., & Payne, D. T. 1967 Parental influence on cognitive development in early childhood: a review. *Child Development* 1967, 38.
- Hoffman, M. L. 1963 Child rearing practices and moral deve-

- lopment: generalization from empirical research. *Child Development* 1963, 34.
- Kagen, J. & Moss, H. A. 1962 Birth to maturity. A study in psychological development.
- 小嶋謙四郎 一九六八 乳児期の母子関係——臨床心理学的接近
——医学書院
- Medinnus, G. R. 1961 The relation between several parent measures and child's early adjustment to school. *Journal of Educational Psychology*, 1961, 52.
- D・B・D研究会 一九六七 D・B・D研究会誌第八卷
- Peterson, D. R., Becker, W. C., Hellmer, L. A., Shoemaker, D. J., & Quay, H. C. 1959 Parental attitudes and child adjustment. *Child Development* 1959, 30.
- Rapaport, D. 1958 Behavior research in collective settlement in Israel: the study of Kibbutz education and its bearing on the theory of development. *The American Journal of Orthopsychiatry* 1958, 28.
- Rheingold, H. L. (Eds) 1963 Maternal behavior in mammals.
- Rosen, B. C. 1964 Social class and child's perception of the parent. *Child Development* 1964, 34.
- Schaffer, H. R. 1963 Some issues for research in study of attachment behavior. Foss, B. M. (Eds) *Determinants of infant behavior* II. 1963.
- Spitz, R. A. Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen (邦訳：母子関係の成りたち 生後一年間における乳児の直接観察 古賀行義訳 昭和四〇年 同文書院)
- Sluckin, W. 1964 *Imprinting*. 110~116.

